

日本遺産「鮭の聖地」の物語～根室海峡一万年の道程 普及啓発展示会 「メナシのアイヌとともに生きる ～加賀伝蔵・松浦武四郎・南摩綱紀～」

令和5年度特別展として実施しました「メナシのアイヌとともに生きる～加賀伝蔵・松浦武四郎・南摩綱紀～」が、日本遺産「鮭の聖地」の物語～根室海峡一万年の道程 普及啓発展示会として、下記のとおり三重県松阪市において開催されます。加賀伝蔵と交友のあった松浦武四郎の記念館での開催で、講座なども開催します。この機会に、ぜひ、お立ち寄りください。



●期 間 9月29日(金)～11月26日(日)

●場 所 松浦武四郎記念館 (9:00～16:30)
三重県松阪市小野江町 383

●内 容 (1) パネル展示

- ①「メナシのアイヌとともに生きる～加賀伝蔵・松浦武四郎・南摩綱紀～」
- ②「武四郎が見た根室管内と北方領土」
- ③「日本遺産「鮭の聖地」の物語～根室海峡一万年の道程」

(2) 資料展示

- ①「加賀家文書等資料」から、松浦武四郎書簡やアイヌ語通辞(通訳)に関わる資料

(3) 講座

①松浦武四郎記念館

日時 令和5年9月30日(土)10:00～11:30

内容 「アイヌ語通辞(通訳) 加賀伝蔵物語」

別海町郷土資料館 学芸員 石渡一人、羅臼町郷土資料館 学芸員 天方博章

定員 60名 申し込みは不要です。

②WEB講座

日時 令和5年11月12日(日)10:00～11:30

内容 「会津藩標津代官南摩綱紀とメナシのアイヌ」

標津町ポー川史跡自然公園 園長 小野哲也

申込 鮭の聖地メナシネットワークFBかQRから
お願いします。



「メナシのアイヌとともに生きる～加賀伝蔵・松浦武四郎・南摩綱紀～」その1

令和5年度当館特別展、日本遺産「鮭の聖地」の物語～根室海峡一万年の道程 普及啓発展示会として開催した展示会は、松浦武四郎と深い交友を重ね、その想いを継いで根室海峡沿岸のメナシの地で実践した通辞(アイヌ語通訳)加賀伝蔵と会津藩士南摩綱紀がメナシのアイヌたちとの共生を目指し、いかに向きあったのかを紹介するものです。今月号から紙面にて幕末の蝦夷地で、メナシのアイヌとともに生きた人々をご紹介します。

「メナシのアイヌたち」

根室海峡沿岸の国後島に面した地域一帯は東方を指す「メナシ」と呼ばれていました。

「メナシ」のことが書かれている最も古い史料は、1618年(元和4)のデ・アンジェリスの第1蝦夷報告があります。「毎年東部の方にあるミナシ(メナシ)の国から松前へ百艘の船が、乾燥した鮭とエスパーニャのアレンカにあたる鯨という魚を積んで来ます。多量の貂の皮をもってきて来ますが、彼等はそれを獺虎皮(ラッコ皮)といい、わが〔ヨーロッパ〕の貂に似ています。」メナシのアイヌは松前(和人地)から漆器や絹布・綿布・鉄鍋などを、千島アイヌのラッコ毛皮・鷲羽等と交換していました。千島側からのこうした品は「軽物」と呼ばれ、和人社会で大変珍重されたため、蝦夷地の交易品が藩の財政を支えていた松前藩にとって重要なことでした。

アイヌとの交易の独占権を持っていた松前藩は、商場知行制(上級藩士による交易)によってロシアや北千島の産物を手に入れていました。のちに国後島にも商場としてクナシリ場所を設置しました。

その後、場所請負制(商人が交易を請け負う)へ変わると、メナシの地・キイタツ場所とクナシリ場所を請け負った飛騨屋久兵衛は、ニシベツ(別海町本別海)の西別川をはじめメナシの主要河川に大量にのぼる鮭で塩引きの製造をはじめます。

しかし、1789年(寛政元)、飛騨屋の場所支配人らから非道な扱いを受けていたアイヌが蜂起し「クナシリ・メナシの戦い」が起こります。背景には、鮭のしめ粕づくりという重労働を強制的に課せられ、冬の保存食の干鮭などが作れず、アイヌ自身の暮らしがままならなくなったことがあります。戦いは松前藩により鎮圧され、以後メナシのアイヌは、交易の媒介者から一介の労働者へと変えられていきました。



※写真等・上段2枚「蝦夷物語」中段「ニシベツ鮭」下段「東西蝦夷山川地理取調図十四」(別海町加賀家文書館蔵)

別海町郷土資料館だより No.290

発行日 令和5年9月1日
発行所 別海町郷土資料館
別海町別海宮舞町 30 番地
電話 0153-75-0802 (FAX 兼)

編集後記 今年度は、白老町・ウポポイや三重県松阪市での日本遺産普及啓発展示会を開催しています。ウポポイはすでに終了しましたが、道東地方の知名度は、低いと感じました。人のいる所には歴史有りと、様々な人々がたくましく生きた証が沢山あります。少しでも伝えていけたらと思うところです。